

## 第十二回 教行信証に学ぶ会 講師：延塚知道先生

### ライブ版

2021(令和3)年10月14日

会場 円徳寺

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

## 講義 1

どうもこんにちは、少しコロナが収まって来ましたので気が楽に、今日はたくさんの方においでいただきまして責任を感じます。やさしく言うのが難しいのです。『教行信証』は親鸞聖人が命をかけて筆をとって書いた書物です。ですからその方法論と言いつ、内容と言いつ、よほどの学識がなければ読めないという面があります。ただしかしそれだけではなくて、学識がなくても自分が救われるか救われないかという視点で聞いてみると時々びくつとすることがある。そういうふうに関心して聞いてみると、言つてもいい書物ですから理解するのはたいへん難しいのですけれども、分らないところはしょうがない、けど必ず分かると思つて話をしていきます。

皆さんと、今、『教行信証』の行の巻をはじめから少しずつ読んでいくわけです。各巻は経・論・釈の引文になつていきますから、まず、最初は經典の引文群、これがあるわけです。当然のこと『大無量寿経』の引文、しかも<sup>1</sup>行の巻は「諸仏称名の願」、第十七の諸仏称名の願が標竿・柱になつていきますから、その第十七願を中心として、成就文、因願等を引文していくのが『教行信証』の各巻の通例なのです。ところがこれまでお話ししたように、行の巻だけは十七願の成就文と因願というよりも、「三誓偈(重誓偈)・「東方偈(往觀偈)」というものが引用されていましたね。ですから他の巻と少し引用の仕方が違うのです。

なぜかと言いますと、「行」と言うのは簡単に言えば、私たちのような凡夫を完全に救い取らねばならない行為ですね。ですから行の解説だけでは済まない。むしろ救われない私たちがどうして救われるのかということとが『教行信証』の大きなテーマになつて行の巻以降ずっと続いていくわけです。それを先取りして、お念仏の行はどんな人も必ず救い取るのだということを先取りして、親鸞聖人が行の巻で言おうとしているものから、第十七の諸仏称名の願の説明ではなくて、今申し上げたように、

凡夫をどうして救い取るのか、それを為の巻ですでに『教行信証』の最後まで、あるいは『大経(大無量寿経)』の最後まで読み通して、それを為の巻の経文引証のところで表そうとしているために、他の巻とは少しちがった引用の仕方になっていると思います。

私たちは親鸞聖人の教えによって自力では救われたい、自力でなんでもできると思っただけでも、それは私たちの傲慢であった。死の前も立つてみるとなんにもできない。それと同じように日頃の生活の中でも本当は何一つできていないのだけれども、生きている時には、私たちは自分の力だけが頼りだと思っただけで生きています。せつかく親鸞聖人の教えに触れて他力の教えに目覚めたとしても、そういう本能は死ぬまで消えない。死ぬまで人間であるということは消えない本能ですね。ですから親鸞聖人は、私たちの自力を、はつきり言えば親鸞聖人ではなくて、『大経』が私たちの自力を二つに分けて了解している。

第十九願の「修諸功德の願」、これは自力ですね。これは『観経』を中心として、自力がなければ他力に目覚めたいですから、自力無効ということを通して初めて他力の世界に目を開く。ですから第十九願、これをどうしても他力に目を開くために必要な門であるというので「要門」と言います。必要の門、要門ですね。それに対してもうひとつ自力がある。

第二十願、これは「植諸徳本の願」と言われますが、徳本と言っただけは仏になること、自分が仏になつていくこと、それを諸々の功德によつて植え直す。つまり私たちは他力の仏教に触れて、「ああ、自力では救われたいんやな」と、大きな感動をいただきますね。けどもその自力はそれで消えるわけではないから、いつの間にか「もううちよつと真面目に聞かないといけないのではないか」とか、「コロナで休んだら、ひよつとしたら、せつかく聞いたのがだめになるのではないか」と思っただけで、自分が仏になることまで、自分で決めようとする。自力と言っただけはなかなかつかないもので、「自力自力と言っているのが自力や」と、昔の北陸のばあちゃんが言ったことがあるけど、つまり自分では自覚できないほど深い自力が人間の中にいつも

ある。

ありませんかみなさん、ちよつと仏教を聞くと「仏教を聞かない人はだめだ」と思っただけで一生懸命仏教についてしゃべる。そうすると段々段々嫌がられて(笑)、「ああうつとういじさんが来た」とか、「うつとういじばあさんが来た」と嫌がられて、気が付いたら孤立していくということになっていく。そう言うふうには自分では気が付かない、良かれと思っただけのことの中にいつも自力が姿を隠している。そう言う自力を「第二十願の自力」と言っただけで、要門に対して、これは「真門」と言われます。この第二十願の自力にまで明確に言及した祖師は親鸞聖人以外にいません。七祖の中でも親鸞聖人以外にはいません。

ただ、皆さん「存知のように源信僧都ね、あの方が「煩惱障眼雖不見大悲無倦常照我」煩惱にまなこさえられて、みだてまつらずといえども、大悲ものうきことなくて、つねに我が身をてらしたもう」

「正信偈」東聖典207、西207、島12-53」と、こういう言葉を残しているでしょう。つまり煩惱の身でどうしても自力が消えないのだと、だから仏様の世界をいつも見ようとしても煩惱のために見ることができない。しかし、このままで大悲の中にあるのだと。だからこの第二十願と第十八願とは重なっているのだと。そもそも第二十願の自力は人間が反省しても反省しても届かないのですから、そのことが「ああ、これはどうにもならん」と教えられた時には、当然仏様の世界に触れているはずなんです。だから第十八願と第二十願とは重なっていて、この第二十願の機を最終的にそのまま救い取る、それが第十八願のはたらきなのだということ徹底的に明らかにしていくのが親鸞聖人の『教行信証』のお仕事です。

そしてそれは実は『大経』がそうなっているからです。『大無量寿経』をよく読むと『大無量寿経』の最後が、どうしても煩惱を捨てきれない「三毒五悪段」とあるでしょう。仏教が分かったとしても、弥勒菩薩のような菩薩でも煩惱が抜けないとお釈迦様は言っただけです。本人は覚つたと思っただけかもしれないけど、抜けてない。その抜けてないのは人間だから。

だからはっきり人間に目覚めて群萌の一人になり切りなさいと。自分が偉いのではない、仏教を聞いて俤そうに人に説教していたけど、そうではなくて、自分も群萌の一人なのだというふうに、群萌に帰りなさいと、帰り切つたらそのまんまで第十八願の世界の中にあるのだということ、『大経』の最後に「智慧段」で説かれていくわけです。だから親鸞聖人は七祖が明らかにしなかつたけれども、ただ、今言った源信僧都が素晴らしい歌を残してください。その歌を手掛かりにして、「ああ、この二十願と十八願とは重なっているのだ」ということを見抜いていきます。

これはまたその場所に来るとお話をしないと聞かせませんが、せつかく申し上げたので、言うておきますと化身土の巻で自力を明らかにして、第十九願の要門を明らかにしていった後に、今度は二十願の真門を明らかにしていく場所があります。聖典345ページの最初から6行目、その御自釈に『法事讃』の文章がありますね。分かりましたか。これは善導大師の文章なのです。そしてこれは、実は親鸞聖人が法然門下にいた時に、法然上人がさかんにおつしやる文章なのです。ですからこの文章は実は法然上人が指摘している文章なのですが、ここに

「直ちに弥陀の弘誓重なるに為つて、凡夫念ずればすなわち生まれしむることを致す」(東345、西398、島12-117)。「こは真門釈ですから、第二十願は「直ちに弥陀の弘誓・第十八願と重なっているために、凡夫念ずればすなわち生まれしむることを致す」。こう言うふうにして読んでいくわけです。

ところが、これはもともと善導大師の言葉は「直ちに弥陀の弘誓が重きによつて」と読んでいます。分かりますね、第十八願が重いから凡夫は救われるのですよと読んで文章を親鸞聖人は真門釈、二十願を明らかにするところに持つてきて、第二十願は「直ちに弥陀の弘誓に重なるによつて」と読み替えたのです。「重い」という字を「かさなる」と読み替えて、確かに源信僧都がおつしやっていたように二十願の機だということが明らかになった時に、そのまま実は法の世界に救い取られていくの

だから、凡夫であることをやめなくていい、そのままでもいい、一生懸命今やれることをやりなさい。一生懸命仏教が大切だと言うのなら、仏教が大切だということを一生懸命伝えなさい。それでいいのだ、そのまま必ず第十八願の救いの世界に救い取ってください、と言うのが『大経』の最後の教えだし、親鸞聖人の『教行信証』の二十願の機を明らかにする意味はそこにあるわけです。

つまり凡夫のまま救われていくということが徹底されていく、従つて経文引証も「東方偈」が中心に引かれていて、「東方偈」は前半が第二十二願の浄土から来た先生。分かりますかね、浄土から来てくださった人でなければ浄土には行けませんよ。いいですか、その辺はよく見抜きなさいよ。それは本当に浄土から来たという意味がなければ浄土を明らかにすることはできないのだから、いくらうまく言うていても、それはよく見定めないと聞かせません。

いや、実は私を大切に育ててくださった寺川俊昭先生がお亡くなりになりました、明日広島に行つて明後日お葬式です。私は、先生と親しくと言うか、それとも凡夫としての情もお互に通じ合った。けれどもそのままで救われるということが先生によつて教えられた。だから亡くなつたと言われてもなんともない。浄土に帰つたと、それはもう直感的に思うのです。浄土から来て私のような者をお育てくださつて、また浄土に帰つて行つた。だから悲しいという気はあんまりありません。覚悟をしてみましたけれども、何か悲しいという気はあまりなくて、亡くなったというよりも何か法身として何時も私といっしょにおつてくださる。そしてどんな時でも「そのままいい」と言つて、浄土から来た先生なのだということもいつも思い出させられます。そう言うことを言い出すときがないですね。

松原祐善先生は、私の人生を決定的に方向を決めて下さつた。どっち向いていいかわからずうろろうろして、何処で力を尽くしたらいいのかさっぱり分からん者を「こっちだ！」とはっきり教えて下さつた。それを寺川

先生は学問の上で、親鸞聖人の『教行信証』はこう読むのですよ、こう読むと、そう頑張らなくてもいい、凡夫のままでも救われると書いてあるでしょう、と言って学問を手取り足取り教えて下さった。しかしお二人とも、どういったらいいか、底抜けに明るかった。いつしよに居てうれしかったし、いつしよにおつて楽しかった。なんかよく分からないけれども底抜けに明るかったですね。松原先生がお亡くなりになる前に寝たきりになって、そうしたら西元宗助という先生のお友達が先に亡くなったのです。そうしたら先生はベッドですから、何も書けないのですが、奥さんに口伝えで「私の方が先に往くと思っていましたけれども、西元さんあなたの方が先に往かれましたね。浄土で待つていてください。私も必ず参りますから」という弔電をうった。僕はいい弔電だなと思つてね、私もそんな気持ちになります。

お二人の先生が待つていてくださる浄土に必ず参りますと。必ず参りますので待つていてください。そんなふうに思うのですね。それは世間でお世話になつたとか、そう言うことで自分の先生だという人はたくさんあります。そうではなくて、仏教はこの世間を超える世界を開いてくださった。それは浄土から来て、そしてこの娑婆で、何処にも浄土のないところで浄土を開いてくださった。私のような者でも浄土に生まれたいと、こういうふうに変えてくださった。それは浄土から第二十二の本願に乗つて浄土から来てくださった先生だつたと。そして私の方はどうにも救われない二十願の機でしたということ明らかにするために、「東方偈」の前半は二十二願、後半は二十願、それが歌われていました。ですから親鸞聖人はそれを大切に引用なさつて、先ほど申しましたように、二十二願の、私たちのような者を本当に救い取つてくださるのは本願しかないのだと、凡夫のままでもいいのだと言う事を教えてくださっているのだと言うふうに申しました。

それを読み取つていくのが第二十二願の機の推求、二十願の機の探求なのですが、一つは、それを促したのは源信僧都であること、もうひとつは、

これは、これから私はまた本を書こうと思いますが、法然上人が出世本懐経という大乗仏教では『法華経』と『大経』に決まつているのです。『大経』は読んだように出世本懐の言葉が述べられているのですから『大経』が出世本懐経に決まつているでしょう。なのに、法然は、釈尊の出世本懐経は『阿弥陀経』だと言ふのです。だから、これは、もしかしたら誤解を受けるかもしれない。なぜ『阿弥陀経』と言ふのかね、それはさつき言つたように第十九願の『大経』の下巻になると、廻心がまず説かれて、それから願生浄土の道が説かれて、そして最後には二十願の機だと言ふことが説かれて、どうしても救われないですよと言ふことが説かれて、それを解くのは浄土から来た阿弥陀の智慧を持った人だけなのだ。だから浄土から来た阿弥陀の智慧を持った「智慧段」のところで初めて二十願の機が救われるのだと言つて、群萌の仏教が完結していくわけです。

そうすると、簡単に言います。お釈迦様と阿難との出遇いは二十願の機の阿難が救われなければ『大経』は完結しないのです。二十願の機の問題が凝集的に説かれているのが『阿弥陀経』なのです。「執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨命終時：…」とあるでしょう。一心に称える、一心に称える人間の一心さをそのまま救い取るよと言ふのが『阿弥陀経』ですから、『大経』の一番最後の「智慧段」のころをぼんと引張つて大きくしたのが『阿弥陀経』。それから、一番最初の本願成就文の廻心のころをぼんと引張り出して大きくしたのが『観経』。だから親鸞聖人は、『無量寿経』を『観経』と『阿弥陀経』をつつんで『大無量寿経』というふうに言ふわけです。

そうすると法然の目と言ふのは正しいでしょう。最後の『阿弥陀経』の問題が解決しなかつたら、お釈迦様と阿難との出遇いが全うしないでしょう。だから『阿弥陀経』が出世本懐経なのですよ、こういうふうに言うのです。だから親鸞聖人は二十願の問題を明らかにしなければならかつたのは、一つは源信僧都、もうひとつは法然上人、その二人の祖師の示唆で「群萌の仏教」・『大経』が完成していくことになるわけです。

まあそういうことなのですが、そういうことが大変なことなのよ。普通は菩薩道で救われていく、それが、今言った自力のまま、凡夫のまま信心によって救われていく。そういう仏教。それが経文引証のところでおさえられていると思います。その経文引証の最後が『悲華経』という經典で最後はおさえられていきます。ページ数でいうと161ページです

(西145~146、島12-10)。親鸞聖人はたいへん準備周到な方ですから『大経』の教えは一言で言うとお弥陀の本願でしょう。そうすると弥陀を説いている。弥陀の本願と弥陀の浄土を建立した、そして一切の人を救うという阿弥陀のはたらきが説かれていますね。ですから真宗では阿弥陀如来が本尊でしょう。そうするとそれは仏教と違うのではないかと。仏教はお釈迦様でしょうと。真宗以外は全部そうですよ。釈迦教ですから。他の八宗は全部お釈迦様が中心なわけです。ところが浄土教だけは阿弥陀如来が本尊で、例えば本山に行くと阿弥陀堂と大師堂とあるでしょう。阿弥陀如来が本尊になっているわけです。そうするとどうしてもお釈迦様はどこに行つたのという話になる。そういう批判を受けるわけです、大乘仏教からね。おかしいではないか、仏教は何と言ってもお釈迦様でしょうと。

お釈迦様から全部の仏教は始まっているのに、浄土教だけ、なんで「阿弥陀、阿弥陀」と言うのか、それはおかしいだろうということがあるから、阿弥陀と言ってもお釈迦様の教えでしょう。お釈迦様の説法の中に阿弥陀がいらつしやるのであつて、だからお釈迦様の説法以外にないよということと言つたために、この『悲華経』というものをここで引用してきました。『大経』が弥陀を説いている經典だとすると、この『悲華経』は釈尊を説いています。『大経』が弥陀の大悲を説いているとすると、『悲華経』という經典は釈尊の大悲が説かれている經典なのです。ですからここまで全部弥陀を誉める『大経』の引文でしたけれども、それは釈尊の説法なのですよということを確認するためにひとつは『悲華経』が出されています。そしてこの『悲華経』の内容を読みますと、

「大施品の二巻に言わく、願わくは、我、阿耨多羅三藐三菩提を成り已らんに、無量無辺阿僧祇の余仏の世界の衆生、我が名を聞かん者、もろもろの善本を修して我が界に生まれんと欲わん。願わくはそれ捨命の後、必定して生を得しめん。ただ、五逆と、聖人を誹謗せんと、正法を廢壞せんとを除かん、」とありますね。

これ第十八願と内容がほぼ一緒でしょう。お分かりですね、もう詳しく言わなくても。そうするとお釈迦様の大悲を説いている『悲華経』の中心はこの文章なのだ、要するにお釈迦様は弥陀の本願の大悲を説くためにこの世に生まれてきたわけですから、この文章が実は『悲華経』の中心なのだ、そしてそれは『大経』で言えば第十八願と重なっているのよ。だからお釈迦様の大悲と言つても阿弥陀如来を説く以外にないのよ、ということと言つたために、ここに『悲華経』で結んでいます。それを知つておいてください。

もう一つあります。『悲華経』「大施品の二巻に言わく、」とありますね。これは、まあこういうことは知らなくてもいいと言えは知らなくてもいいのですが、知っておくとやっぱりよく分かる。これ本当は『悲華経』の「授記品の文章なのです。本当はね。ところが親鸞聖人はここに「大施品」とあるために、昔からこれは親鸞聖人が読み間違えたのだというか、あるいは親鸞聖人がお読みなつた『悲華経』はそうなつていたかもしれない。と言つか、どつちかなのです。ところがこの後も『悲華経』が出てきますが、親鸞聖人はちゃんと分かっている。この後に『教行信証』でも『悲華経』の「授記品」が出てきます。だから「授記品」ということはよく知っているわけです。そうするとあえて変えたということになります。親鸞聖人はよくそういうことをやられます。なぜかという第十八願をお説きになつた釈尊、その大悲、大いなる施し、第十八願を説いて下さつたからこそ、それこそお釈迦様の大いなる施しなのだ。そういう感動があつて、もともと「授記品」をわざわざ「大施品」というふうに変えられて、この辺が親鸞聖人のすごいところよ。分かるでしょう。お釈迦様が何が有り難いかと言

うと、弥陀の本願を説いてくれたから有り難いと、しかも第十八願、そこに極まるのだと。それこそ大施でないか。だから「授記品」でなくてわざわざ「大施品」というふうに変えて、ここを引用しているわけです。私はどうしてもそうしか読めない。親鸞聖人が間違っていることはありません、いいですか。

鎌倉幕府に、北条氏が鎌倉幕府に一切経を持つているわけですよ。一切経を持つているところはそうなのです。九州では江戸時代には大宰府にあつたのよ、一切経は。だから大谷大学の学問の伝統は大宰府から、一番最初は大宰府なのです。だから一切経があるところというのはそういうのです。ところがその一切経でも間違いがあるからね。だから親鸞聖人は鎌倉幕府に招かれて一切経を校合するのです。正しく直すのです。その仕事を親鸞聖人はやつているわけです。一切経を読むということはすごいことですよ。一切経つて、その壁ひとつよりもつとあるからね、それを全部読んで「あつ、これ違う、これ違う」と言つてチェックしていくのですよ、親鸞聖人が。そしてあと調べられないから、多分チームがあつて、「これちよつと一回調べて、これ調べて」と指示したのが親鸞聖人だからね。親鸞聖人が字を間違っていることはありません。ほとんどない。そもそも「大施品」と「授記品」を間違っているような馬鹿なことは絶対ありえない。とするとわざわざ変えたとは思えない。そうすると何故変えたか、それはお釈迦様が弥陀の第十八願を説いてくださった、それがおおいなる施しや。それ以外にないでしょうと言ふ親鸞聖人の思いを込めて「大施品」にしたのだと思います。まあその二つの点をこの『悲華経』のところを注意しておいていただきたいと思ひます。

それでこの経文引証が終わりますと、今度は親鸞聖人はこの經典の、今まで引用してきた經典の大切な核心を「御自釈」で述べます。161ページですよ。『悲華経』の後ですね。

「しかれば名を称するに、今まで『大経』の念仏を説いてきたわけですからね。「名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し」、能く衆生の一

切の無明を破り、「能く衆生の一切の志願を満てたまう。」この「能」という字は、如来の方からよくしてくださるという意味です。「能令速満足功德大宝海」「浄土論」、世親が歌うでしょう。あれも如来の方から寛りを開いてくださるという意味です。だからこの「能」という字は、如来の方から衆生の一切の無明を破つてくださり、そして如来の方からよく衆生の根本志願を満たしてくださる。分かりますか。私たちは娑婆の生活をしていきますから、娑婆の喜びもいっぱいありますね。息子が結婚した、孫ができた、可愛らしい孫ができて幸せだ、と色々思いますでしょう。そういう幸せもいっぱいあるけど、なんかどこか満ち足りななあみたいな、なんとなく将来が不安で、どうなるんやろう。不安で満ち足りない気持ちどこか残つていく、その根本志願を如来の方から私たちに満たしてくださるのだと。

もともと私が申し上げましたように、皆さんは仏様の世界に生まれてきました。そして今も仏様の世界で生かされています。命終われば必ず仏様の世界に帰つて行く、それが命の事実です。だけど頭だけはそう思わない。「俺が頑張っているから、子供たちを養つてきたのだ」とか「俺が頑張っているから、今まで食べてきたのだ」とそんなことばかり思つて、いつも自分を中心にしか思わない。その自分を中心にしか思わない根性が仏様の世界を忘れさせたのです。だから本願によつて、自力によつては救われないよということを教えて、もともと他力の世界におつたのですよということを教えるわけです。本願の教えはね。それを教えられて初めて、生まれた時のもともとの自分に戻るわけですから、そこに娑婆の一切の喜びや苦しみを超えて、どう言うたらいいかわかんけど、命の方からと言うか、命そのものが喜ぶような、ね、親鸞聖人も貧しく生きてしまふ。だけどあれは命そのものが喜ぶ世界を生きただけです。

僕は何度もインドに行きましたけど、インドにマザーテレサという人がおつたでしょう。あの人も貧しい、全部寄付をしてね、そしてなんかロールスロイスなんか貰つたんだな。ノーベル賞なんか貰つた時に、それも全

部売つて、そして貧しい人たちのところに捧げて生きていったでしょう。なんでか、それが根本志願を満たしたからです。みんな共にいる、貧しい人も豊かな人もない、みんな仏様の子だ、あるいはマザーテレサで言えば神の子だから、みんな一緒に生きていく、その世界こそ実は、命が本当に喜ぶ世界なのだ。

私たちがたまたま500円拾ったとか(笑)、たまたま宝くじが当たったとか、それもまあ喜びやけど、そんな喜びとは違って「信心歓喜、歓喜・喜び、命の底から喜ぶ、そういうものに私たちを変えて下さった。それが本願の名号なのだ」という意味で、「一切衆生の」、簡単に書いていますけど、「一切衆生」ですから、それに漏れる人は一人もないのよ。ね、どんな人も。一切衆生の無明を破り、無明と言うのは自分が正しいという自己執着を破つて、もともとある世界に目を開いて、そして我々の根本志願を満たしてくださいるもの、それが南無阿彌陀仏の教えなのだということ、ここに経文引証が終わると親鸞聖人は、ここに持つてきます。

これも「御自釈」なのですが、すいませんね、僕は学者なものですから、これは曇鸞の『論註』の「讚嘆門釈」の言葉をそのまま持つてきています。この行の巻が始まる一番最初のところ大行釈。ここでも申しましたが、「大行」とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。聖典157ページ(西141、島12-16)です。大行とは何かと言つと、「無碍光如来の名を称するなり」とおさえているでしょう。これも『論註』の言葉です。そして、そのはたらきを表す「御自釈」も、実は、これもそのまま『論註』の言葉なのです。そんなふうに親鸞聖人は経・論・釈の引用だけでなく、「御自釈」もほとんど、どこからの引用なのです。なぜかわかりますか、それは徹底的に凡夫として救われていった親鸞聖人ですから、ご自分の感動とか、ご自身の意見とか、ご自身のごことは一切言わない。自分が申し上げたいところだけでも、私のような凡夫が申し上げることはできません。ただ先輩に、念仏を生きた曇鸞大師がこうおっしゃっているでしょう。私もその通りだと思えます。こういう言い方です。それが『教行信証』の

「文類」という方法論です。

「**頭浄土真実教行証文類**」。龍樹や世親はこれから読んでいきますが、龍樹や世親は大乗の菩薩ですから、自分の感動を堂々と述べています。ところが親鸞聖人は末世の仏弟子として論を書いたわけです。だから私のような者は論を書く資格はありません。こういう態度で、自分が申し上げたいことはすべて念仏を生きた方たちがおっしゃっている言葉でまとめていく。それは自分の主張、自分の恣意、自分の個人的な感想、そういうものは一切排除する。そのために「文類」という方法をとりました。これも偉いでしょう。愚禿の私が申し述べようようなことはありません。

「**悲歎述懐**」なども『大経』の「**三毒五悪段**」に言葉がみんなあります。それから「**主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ**。」という、あの聖道門を批判する、あの「化身土卷末」の文章も『大経』にあります。そんなふうにすべて親鸞聖人は「文類」として表そうとしているところに親鸞聖人の偉さがあります。ここもそういうふうに思ってくださいたら有難いです。大行とは何か、大行のはたらきも曇鸞大師によるのだと。こういう言い方ですね。

ここから今度は、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空という七祖が引用になっていきます。いやあ、難しいね。七祖の、これは知っておいたいただきたいのですが、七祖の引用の中で一番長いのは龍樹。龍樹菩薩のところが一番長い。なんでかという、みなさんご存知のように龍樹菩薩は「八宗の祖」です。どの仏教においても、大乗仏教を起したのには龍樹だから、その大乗仏教を起した龍樹のところに自分の立っている仏教が完成していなかったら大乗仏教になりませんね。そうですよね。だから親鸞聖人は龍樹を一番長く引用しているのです。

龍樹は普通は、普通の見方からすると、自力によつて「初歡喜地」を得た、初歡喜地の菩薩だとみんな見たわけです。ところが『十住毘婆沙論』によると初歡喜地の菩薩は空を覚った菩薩ですから、ところが『十住毘婆沙論』をみると空を覚ったと書いてない。「如来の家に生まれる」と書い

であるのよ。いいでしょう。普通だったら菩薩だったら空を覚ったのだと言えがいいのです。ところが『十住毘婆沙論』になると、実は初歡喜地に立つて私は如来の家に生まれたのだと、「浄土」と言う言葉でなくて、龍樹は「如来の家」と言う。実は龍樹菩薩をずっと読むと、皆さん寝るといっても死にます(笑)。ほとんど分らない(笑)。あの西藤君でもたいがい聞いとるけど文句ばかり言うのです。龍樹のところになると分らんから。死にます。

それはものすごく読み替えが多い。親鸞聖人の読み替えが多いのです。そういうふうにして、つまり初歡喜地に立った空を覚った菩薩を浄土の人として位置付けようとするために読み替えが多いし、なかなか難しい、それを言うために。けれども龍樹が言っている文章の中にそういう言葉があるのです。龍樹の引文は聖典161ページの終わりの方(西146、島12-10)、『十住毘婆沙論』の引用になります。ここからの龍樹の引文はすべて『十住毘婆沙論』から引用されています。いいですね。そして、161ページの最後、「かるがゆえに『家清浄』と名づく。」という言葉がありますね。これ分かりますか、「家清浄」。例えば、皆さんよくご存知の世親の『浄土論』(願生偈)、あれは浄土の一番最初の功德、総相と言われますが、浄土を一言で表せば何かという「清浄功德」。だからこの清浄というのは、浄土を表す言葉として、大乘仏教を学んでいる人からみれば、清浄と聞いただけでこれは浄土なのだということが分かるのです。しかも皆さん「清浄」というと美しいとかきれいと清らかとしか考えないでしょう。それは量的な考え方なのであって、そうなるかと、どこからどこまでが、女性がおるので言いくいけど、どこからどこまでが美人で、どこからどこまでが、その・(笑)、その何処で線を引くのかなかなか難しい。僕は結婚する時うちの奥さん「まあまあいい」と思って結婚したんやけど、友達みんな「あんなのと結婚するな」と言っていて、言われたんやけど、「うるさい」、わしがいいと思って結婚したんや。けどよく考えたらやっぱり友達の見解が正しかったかな(笑)。つまり量的な考え方だった

らどこからどこまでという境がないのよ。仏教は、いいですか、私たちの頭は量的にしか考えられませんが、仏教は質の違いを言っているのです。だからこれ「清浄」と言っても、清浄功德は「勝過三界道」でしょう。分かるね。言っても分らんか。あんな、「願生偈」開けてごらん。聖典135ページ(西1445、島8-11~12)。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国。これが「帰敬偈」ね。その次に「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応」。これが「発起序」と言われる序です。ここまでは序です。それから後が浄土の莊嚴になります。第一番目が「清浄功德」。ここに「觀彼世界相 勝過三界道」とあるでしょう。彼の世界の相を觀するに、彼の世界と言うのは阿弥陀如来の世界よ。阿弥陀如来の世界を觀するに、この欲界、色界、無色界の娑婆・三界を超えた世界である。つまり阿弥陀の世界は、この世を超えた世界である。それを「清浄」という言葉で表すのです。だから龍樹が「如来の家」と言ったときに、家は清浄である、こういうふうには『十住毘婆沙論』に出てきますから、これは当然世親のところまでいくと浄土の莊嚴、「清浄功德」としてあらわされる莊嚴だということが分かります。

もつと正確に言う、聖典162ページ、印を付けてください。終わりにから4行目(西148、島12-11)、「初地を得已るを、初歡喜地を得おわる、菩薩が初歡喜地を得おわるというのは、「如来の家に生まる」と名づく。浄土に生まれるということですよ。龍樹がちゃんと言っているでしょう。そして「一切天・龍・夜叉・乾闥婆 乃至 声聞・辟支仏等、共に(阿弥陀を)供養し恭敬するところなり。何をもつてのゆえに。(どうしてかと言つと)この家(阿弥陀の家ですよ)、過答あることなし。(阿弥陀の家は一切の間違ひ、「過答(かく)」というのは答(とが)、分かりますね、答、悪いこと、一切の答がないからである。」「かるがゆえに世間道を転じて出世間道に入る。」、分かりますね。如来の家というものは、世間を超えた出世間道を実現するのだと。これは龍樹の言葉です。素晴らしいでしょう。



ですから龍樹は初歡喜地の菩薩は浄土に生まれるということやと。と  
いうことを龍樹が言うところ。そしてそこに私たちの世間道を超えて出世  
間道に立つということがあると。だからさつき言った「歡喜地」なんです。  
「歡喜」と言うのは500円拾ってうれしいというのではなくて、命の底か  
ら、私たちの命そのものが喜んでいく歡喜、「初歡喜地」なんだというふ  
うに龍樹の引文の半分は、その初歡喜地の解説で終わっていきます。その  
大切などころだけを今言いました。初歡喜地の菩薩と言うのは、実は龍  
樹で言うと、「念仏によつて浄土に生まれる者になった」ということだと。  
そして「如来の家に生まれた」ということだと。そこに世間道を超えて出  
世間道を生きていく者に変換させられるということやというふうに、あ  
たかも龍樹の書いたものを見ますと、止観行で初歡喜地の覺りを得るの  
だというふうに書かれているものがほとんどなのです。

ところがこの『十住毘婆沙論』だけは、今言ったように「覺りを悟ると  
言わないで、「如来の家に生まれる」。そして如来の家こそ清浄なのだ、そ  
こに私たちは世間を超えて仏道に立つ道があるのだ、それを「歡喜地」と  
言うのだというふうに、この『十住毘婆沙論』になると、自力の菩薩道で  
はなくて、信心によつて仏道に立つ「信方便の易行」、これが説かれていく  
ことになるわけです。

ですからたたくさんの龍樹の菩薩道を説いた論書はたたくさんあります  
けれども、その中で『十住毘婆沙論』だけはなぜか、今言ったように菩薩  
道の初歡喜地を、菩薩道の覺りが信心によつていただくのだと、しかもい  
ただくから、「如来の家に生まれる」。「浄土に生まれる」。こう言う表現  
で説かれていくところに、浄土教の祖師としての意味があるのだというふ  
うに親鸞聖人が引用していくところですよ。龍樹の最初の方だけ少しお話  
をしました。10分ほど休憩しましょう。 南無阿弥陀仏(休憩)

## 講義 2

難しいところなので、どう言おうかと思つて、悩んで昨日あまり寝られ  
なくて(笑)、今日はぼやつとしていてうまいことしゃべれませんが、今、龍  
樹菩薩の最初の、七祖の最初ですね、それについてお話を始めていますこ  
ろですよ。

この龍樹菩薩は引用文を見ますと、東聖典161ページの終わりから  
6行目から、ここから始まつて162ページ、163ページ、164ページ、1  
65ページ、166ページ、167ページの三分の一のところまでが龍樹です  
(西146〜154、島12-10〜15)。だから長いでしょう。だから言つ  
ているのです、ここをちゃんと読んだら死ぬつて(笑)。ここは難しい。この  
長い引用をしてまで親鸞聖人が龍樹の引用をきちつとしなければならな  
かつたのは、龍樹菩薩のところまで真宗が完成されているのだということ  
言うために、これだけ長い引用になっています。もしそれを入れなかつた  
としたら、浄土真宗は大乗仏教でないということになってしまうから、だ  
から龍樹菩薩のところまで浄土真宗が完成しているということを言うため  
に、これだけ長い引用になっています。

それからもうひとつは、皆さんご存知のように龍樹と天親、これはイ  
ンドの菩薩です。だから「千部の論師(ろんじ)」と言われて、ものすごくた  
くさんの著作がある。例えば龍樹だったら、『大智度論』、『中論』それか  
ら『十二門論』その他『十住毘婆沙論』も当然ですし、たたくさんの書物が  
ある中で、親鸞聖人が引用されるのは『十住毘婆沙論』だけです。この『十  
住毘婆沙論』という書物は、たたくさんの論書の中でも短いものです。そし  
て、この『十住毘婆沙論』は『華嚴経』に説かれている「初歡喜地」、これが菩  
薩道の第一番目ですね。それから第二番目は「離垢地(りくじ)」、はじめ  
は初歡喜地、さつき言ったように、はじめて仏道に立ったその感動が初歡  
喜地として説かれます。それから三番目は煩惱を離れていく、垢(あか)  
を離れる、離垢地。菩薩道は本当は十地あるのです。本当は十地あるの

ですけども、その中で初歡喜地と離垢地だけを註釈したもの、それが『十住毘婆沙論』という論書になります。ですからほとんど初歡喜地について註釈している書物だというふうにご考えてください。

ところが普通は、初歡喜地というと、これまで申し上げたように、こゝまで十信、十住、十行、十回向、こゝからが十地ですから、こゝまで十信、十住、十行、十回向と登って来て、そしてやっと菩薩になつて初めて空の覺りを悟ると言うのが初歡喜地ですから、だから普通だつたら、これは常識としては菩薩道の修行を重ねて、修行を重ねてやっと空の覺りを悟つた。その空の覺りを悟つた初歡喜地の註釈書が『十住毘婆沙論』なのですが、ところがこの『十住毘婆沙論』になると、これから少しずつ申し上げますが、こゝろが菩薩道として説かれるというよりも、「難行道」、「易行道」という言葉を知っているでしょう。「易行道」として説かれていくわけです。つまり難行道というのは、聖道門の自力の修行を指します。それに対して易行道というのは、他力の信心によつて、如来の方から覺りの世界を開いてくださる。「他力の信心」、「信方便の易行」。それが説かれるのがこの『十住毘婆沙論』になるわけです。

そして親鸞に先立つて曇鸞という人がおるでしょう。曇鸞という人はもともとは龍樹の「空」の覺りの学者でした。だから三論宗とか四論宗と言つていますが、空の覺りを悟るといふことはどういふことかといふことを尋ねていく学者、日本で言つて東大寺です。東大寺は『華嚴經』として毘盧遮那仏がおる。空の覺りとはどういふものかといふことを学んでいくのが東大寺の学問です。あれが龍樹の空を直接尋ねていく仏教なのですね。

曇鸞という人はもともとは、龍樹の空を尋ねていく学者でした。ところが皆さんご存知のように、あの方はどうも結核だったのではないかと書かれています。体が弱かった。それで『十地經』という經典の註釈書を書こうとしたときに、自分の命が短く終わるのではないかと言つので、中国の南の方に行つて陶隱居という仙人に命を永らえる法を教えてもらつ

た。そして大したものですが、仙經十卷を授かつたというのですから、たぶん陶隱居の一番弟子でしょうね。多分陶隱居の免許皆伝ですよ。十巻も授かつて、それを意気揚々と持つて洛陽の都に入った時に、ご存知のように菩提流支三蔵に遇うわけよ。

三蔵法師が馬の上で見えたら、曇鸞が「おいお前、仏教の中に、この仙經に勝る法があるか」と。「おれは、この永遠のいのちを授かる道教の仙人から、永遠の命を授かる道を教えてもらったのだ」と言うわけです。まあ今でいうと臓器移植みたいなものや。「心臓移植をして永く命を生きられるという法を得たのだ」と。「どうだ」と言つたら、三蔵法師が馬の上からピツと唾吐いて、そして「お前が言っている命は迷いの命だらう」と、「そうではなくて、本当に目覚めた命に生きる者になれ」と言つて、『觀經』を授けたと言われています。

そうしたら曇鸞はびっくりして、その仙經十巻を焼き捨てたということです。自力を焼き捨てて他力に帰した。その行実が『高僧和讃』の中にずつと歌になつていっているでしょう。和讃で歌われているでしょう。あれは親鸞聖人の言葉で言えば「難行を棄てて本願に帰す」といふことなのですね。ところがそれを、そういう難しい言葉で言わないで「仙經十巻を焼き捨てた」と。安田理深という先生がね、「よう焼いたもんだ、あれを古本屋に持つていったら、相当高く笑売れたはずや」と言つて笑つてましたけど、自力といつしよに焼き捨てた。そこに曇鸞大師の廻心が説明なしによく分かるからね。だから親鸞聖人は曇鸞大師だけ行実を歌にしているのです。それは、そこがよく分かるからです。

その曇鸞大師が『浄土論註』を書くでしょう。その時に挙げるのがこの『十住毘婆沙論』です。一番最初にね。曇鸞大師の『論註』を勉強している人おる？この中で、「謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに、云わく、菩薩阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一つには難行道、一つには易行道なり。」と出てくるわけです。聖典167ページ終わりから4行目のところ(西154、島12-116)。これが『浄土論註』の一番最初で

す。そこを親鸞聖人が引用している。

『論の註』に曰わく、謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案するに、云わく、菩薩、阿毘跋致(空の覚りを求むるに、二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。難行道は、いわく五濁の世、無仏の時に於いて、阿毘跋致(空の覚り)を求むるを難とす。この難にいまし多くの途あり(この難にたくさんの道があるけれども)。粗五三を言つて、もつて義の意を示さん(五つほどあげて、なぜ難しいかということを証明しよう)。一つには、外道の相修善の反善は菩薩の法を乱る。二つには、声聞は自利にして大慈悲を障う。三つには、無願の悪人、他の勝徳を破す。四つには、顛倒の善果よく梵行を壊す。五つには、ただこれ自力にして他力の持つなし。これ等の(ごとき)の事、目に触るるにみな是なり。

たとえば、陸路の歩行はすなわち苦しきがごとし。「易行道」は、いわくただ信仏の因縁をもつて浄土に生まれんと願す。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得しむ。仏力加持して、すなわち大乘正定の聚に入る。正定はすなわちこれ阿毘跋致なり。(浄土の正定聚という清浄は、実は龍樹の空の覚りのことですよ。阿毘跋致。)たとえば、水路に船に乗じてすなわち楽しきがごとし。この『無量寿経優婆塞持論』は、けだし上衍の極致、不退の風航なるものなり。」

(こゝまでが二道釈。『論註』の一番最初ですね。そこに今申し上げたように龍樹の『十住毘婆沙論』をあげて、「難行道」と「易行道」と二つの道を分けたのは龍樹です。『十住毘婆沙論』の中で聖道門の覚りを求めていく道は難行道である。

ところが、やはり聖道門の覚りを求めていく道は厳しいからね、だからそこから落ちこぼれていく人たちが出て来る。その落ちこぼれていく人達を、龍樹は『十住毘婆沙論』の中で「懦弱怯劣」(に)ようにやくこれ(つ)」「怯弱下劣(ごじやくげれつ)」という言葉で叱責しています。菩薩道から落ちこぼれていく人たち。菩薩道を最後まで登つていくという人はほとんどいない。だからほとんどの人は「懦弱怯劣」「怯弱下劣」。これこう読む

とかつこいいなと思うかもしれないが、これはめちやくちやな字よ。「懦弱怯劣」は媚(ごび)つらう、どうですが皆さん、すぐ強い者に媚(ごび)つらう。弱弱しくて、卑怯者で、機根の劣つている者。「怯弱下劣」は卑怯で弱弱しく、機根の劣つた者。つまり菩薩道で落ちこぼれたという以上に、「凡夫」、こういう人たちのために、凡夫に帰つて、本願に目覚めていくという道があるのだというので、「怯弱下劣」「懦弱怯劣」、こういう人たちのために信心によつて空の覚りを頂くという道があるのだということを書いてるのがこの『十住毘婆沙論』なのです。

ですから、さつき長い龍樹の引文の半分は、歡喜地・初歡喜地と言つのは空の覚りを悟るといふ境地であること。それは、しかし空の覚りを悟ると言つても如来の家に生まれるということだと。そして、その如来の家は清浄なる国であること。それによつて私たちは、凡夫のままで仏道に立つという道があるということ。そういう歡喜地の解説なのです。

半分は、今度は易行道になります。そこをちよつと見てみましょう。165ページ(西151、島12-13)、「易行品」というところがありますね。ここが、今言つた「懦弱怯劣」「怯弱下劣」という人のために開かれてくる仏教がありますよということが説かれているところ。そこをちよつと読んでみますよ。

「易行品」にまた曰わく、仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもつて疾く阿惟越致(すぐに空の覚り)に至る者あり。」

こんなふう(に)菩薩道として説かれている道を難行道と言つて、むしろ菩薩道から落ちこぼれた懦弱怯劣、怯弱下劣の凡夫のために信方便の易行が説かれているのである。信心によつて、すぐに空の覚りに至る者がある。こういうふう(に)説かれるのが易行品なのです。

分かりますね、そもそも私たちは真宗の教えを受けていますから、確

かにそうだと南無阿弥陀仏と頭を下げて、凡夫のままに救われていくのだと、皆さんよく分かっていますね。ですからそこから見ると龍樹もあたりまえのことを言っているなと、こう言うふうに見えるけれどもね、この時代は、それこそ菩薩道しかないのですから、全部が菩薩道について書いてあるのに、この『十住毘婆沙論』だけは、今言ったように、信心による仏道が説かれている。そこに龍樹菩薩のすごいところがあるわけよ。そもそも「七祖」と言う人たちは、時代の中で、その時代その時代の中で本当の意味の念仏の教えを明らかにしていた人たちなのです。ところがその念仏の教えと言うのが、要するに常識はずれなのよ。わけ分からんわけよ。

今日は天気がいいからここに百何十人か来てくださつとるけど、今頃みなさん、真光(まひかり、注)のように街に行つて「念仏が大事よ」と言つて教化してきてもらん、だれも相手にせんよ。「念仏とはなんや」という。だからどの時代でも念仏の教えというのは常識外れでね、また菩薩道の方が分かるわけよ、一生懸命努力して、頑張つて、修行してやがて覚りを悟つていくというのは、これは僕らの頭によく合うから、「そうやなあ」と言つて分かるけど、何にもしないのに念仏称えとつて、信心のところ覚りがやつてくるなんて、そんな馬鹿なことがあるかと言つてだれも信じないわけですよ。

注：岐阜県高山市に本部を置く新宗教。指導者(教え主)は、岡田光央。「眞光の業」と呼ばれる手かざしで魂を浄めることで人生の目的「健」「和」「富」の三つを揃えることが可能であるとす。

龍樹も菩薩道の時代に『十住毘婆沙論』だけ、信方便の易行ということを書いていふこと、これがすごいことなのよ。そして空の覚りを研究した曇鸞大師が「分かつた」と言うわけや。あの菩薩道の初歡喜地を、空の覚りを得ると。だから龍樹はみんな菩薩だ菩薩だと言つて、違ふのだと。「あの人は凡夫に帰つて南無阿弥陀仏と言つて、はじめて空の覚りに救われた人や」と見たのが曇鸞です。

だから曇鸞大師の『論註』の一番取初めに『十住毘婆沙論』を読むと難行道と易行道とあると。「私は易行の仏道から龍樹を尊敬します」と、こう言つてわけよ。そうすると信心のところから見れば、龍樹は、あれは凡夫に帰つて、そして初めて阿弥陀仏に帰依した時に浄土に生まれた人なのだ。それを菩薩道では空の覚りと言ひうのだというふうに曇鸞の方が先に見破つたわけよ。すごいと思いませんか。そういうところに龍樹の素晴らしいところがあるので、親鸞はその曇鸞の教えを受けて「なるほどその通り」と、曇鸞大師のおっしゃる通りと。他の論書は全部菩薩道の空の覚りを説いてるけど、『十住毘婆沙論』だけは、凡夫のための仏道が説かれている。そして「信方便の易行」というふうに行信・南無阿弥陀仏の信心」、それが説かれているのが『十住毘婆沙論』なのだ見たのが曇鸞大師、親鸞聖人、ということになります。少しは分かる。何人かの人は「うんうん」と言っているけど(笑)、何人かの人は「うん、そうかな」と、そのほかの人はほとんど死にかけてですね(笑)。

というふうな龍樹菩薩は実に素晴らしいことをこの易行品で明らかにした人だと。つまり空の覚りに自力で至るといふのは方便であつて、親鸞聖人が言うように、自力では仏教は実現しないのだということに目覚めて、そして南無阿弥陀仏と頭を下げるところに空の覚り・浄土がここに來てくださるんだと。そういうふうな説いているのが『十住毘婆沙論』一つだけなのです。素晴らしいと思いませんか。その易行品はさつき言つた通り分かるでしょう。だからここは、仏法に無量の門がある。世間の道に難行道と易行道があるように、仏法にも陸道の歩行はすなわち苦しく、これは自力で覚りを求める道・聖道門です。それに対して、水道の乗船・本願力によつて必ず仏になつていく道、それは楽しいと。

菩薩の道も実は二つあるんだと。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもつてすぐに空の覚りに至る者あり。これね、難行道の方は「勤行精進あり」なのです。もともとの漢文は、それでは読めないから「勤行精進のものあり」と「もの」を入れているのです。だから簡単に

言えば、難行道は勤行精進、つまり一生懸命努力をして頑張るといふ道がある。それに対して、信心によって弥陀の名号を称えてすぐに空の覚りに至る者ありと、「こは」者が入っている。そしてちゃんとその道と、それからそこに空の覚りまで入っている。だから空の覚りと道と得る者がちゃんと易行道の方には完備されてるけれども、難行道の方は実は勤行精進あり、だけなのです。だから道にならないということがここで示されています。

そしてその次に行きます。「もし人疾く不退転地に至らんと欲わば」、もしある人がいてすぐに不退転・空の覚りが欲しいという人がいれば、「恭敬心をもつて執持して名号を称すべし」。出て来るでしょう。名号を称えなさいと。「もし菩薩の身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲わば、当にこの十方諸仏を念すべし」。分かりますね。もし菩薩がこの身において不退転を得て、空の覚りを欲しいというのならば、この、十方諸仏を念しなさい。十方というのは東南西北、四維、上下、つまり世界中の諸仏の名を称えなさいと。

「名号を称すること、『宝月童子所問経』の『阿惟越致品』の中に説くが」として、「西方に善世界の仏を無量明と号す」。西の方に阿弥陀仏を無量の光を持った仏と言っておられる。

「身光智慧明らかにして、照らすところ辺際なし」。これはいいですね。仏様の光の智慧は明らかで、照らすところ辺際なし、どこまでも阿弥陀の智慧が届いていくのだと。

「それ名を聞くことある者は、すなわち不退転を得」と。その名号を聞いた者は必ず不退転をうるのですよ。分かりますね。詳しく言うところには実は読み替えをしているのです。「十方諸仏を念すべし」とあるでしょう。十方の仏さんの名前がずくずくと出てきます。こは。そしてこの西方善世界の無量明というのは、これは本当は、龍樹の『十住毘婆沙論』で言えば、「十方十仏章」の中の西の方の仏さん、これは阿弥陀さんだということに思いますけれども、本当は阿弥陀さんではないのです。けれども

「無量明」、無量の明らかな智慧を持った仏様で、「その身は、智慧明らかにして、照らすところ辺際なし」。そこだけ親鸞が引いているのです。そうするとこれ阿弥陀さんに読めるでしょう。西方の阿弥陀さんしかおるわけじゃないか。と言って、「十方十仏章」の中でこの西方の阿弥陀如来だけを中心に据えて、そこだけを中心に引文しているのがこの引文になります。

だから、親鸞聖人は阿弥陀に救われたのだという自分のところから『十住毘婆沙論』を見るとこう読めるといふふうになるのです。ところがそう読めると言うなら、個人的にそう読んだということになるじゃないかと、こう言うのですが、『十住毘婆沙論』を読むと「十方十仏章」に何百人も仏さんが出て来るのよ。そしてその次に、今度は「弥陀章」が出て来るのです。阿弥陀さんです。つまり「十方十仏章」の中心は阿弥陀さんなのですよということが出て来て、そして「弥陀章の偈」と言って、阿弥陀を誉める歌が一番最後に出て来る。だから『十住毘婆沙論』をずっと読んでみると、最初は何百人も仏さんが出て来るのですが、段々段々阿弥陀さんになっていって、最後にはもう念仏ひとつになっていくのです。だからそこから逆に読めば、「十方十仏章」と言っても阿弥陀さんしかいないでしょうと言つて、親鸞がこうしているのであって、親鸞が勝手に読み替えたのではない。『十住毘婆沙論』を何度も何度も読めば、龍樹はそうなつていると言うふうには読んだわけです。

そうすると今読んでいる限りでは、あんまり違和感はないでしょう。真宗の「門徒」として、信心によって凡夫に帰つて、信心によつて覚りを頂くのですと。そしてその覚りは、「難行道」ではなくて「易行道」なのですよと。それは仏のみ名を称するということですよと。それから十方の仏さんを称えなさいと。まずこう書いとるわ。

そうするとその次に、これはややこしいことを言うようですが、これは「それ、名を聞くことある者は、すなわち不退転を得」と。その次ね、「過去無数劫に仏まします、海徳と号す」。このものも現在の仏、みな

彼に従つて願を發せり。寿命量りあることなし。光明照らして極まりなし。国土はなほだ清浄なり。名を聞きて定んで仏に作らん」と。

ここに出来るでしょう。これ龍樹の言葉よ。「国土はなほだ清浄なり」。阿弥陀の国は清浄の国であると出て来るでしょう。ですから、先に「如来の家」と言つたのが、清浄の阿弥陀の浄土だということがすぐここで分かる。だから「国土はなほだ清浄なり、名を聞きて定んで仏に作らん」と。こんなふうには、西の方の阿弥陀仏のみ名を聞いて必ず仏になるのですよ。浄土に生まれるのですよと、こゝ言つてこゝに引いていきます。

ところがその後「問うて曰わく」とあつて、「ただこの十仏の名号を聞きて執持して心に在れば、すなわち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得。また余仏・余菩薩の名ましまして阿惟越致に至ることを得とやせん」。この問いは分かりませんか。それでは問うていきますよと、これまで説いてきた十仏の名号を聞いて、その名号を称えれば空の覺りを得ると、こゝ言われていたけれども、「また余仏・余菩薩の名ましまして阿惟越致に至ることを得とやせん」というのは、それとも他の仏、他の菩薩の名を称えて空の覺りに至ることがあるのですか？と問うているわけですよ。これまで十仏の名を称えなさい、そうしたら覺りを得るよと、こゝ言つては、それなら十仏以外の他の仏とか他の菩薩の名前を称えても空の覺りに入ることがあるのですかと問うて、「答えて曰わく、阿弥陀等の仏および諸大菩薩、名を稱し一心に念ずれば、また不退転を得ることかくのごとし。阿弥陀等の諸仏、また恭敬礼拝し、その名号を称すべし」。ここに來て阿弥陀の名前が出てきます。

これまでは十方十仏の名前、たくさん、『阿弥陀經』の六方便があるでしょう。たくさん仏さんの名前が出て来るでしょう。「東方亦有 阿閼鞞 須弥相仏 大須弥仏 須弥光仏 妙音仏・」、ああいう仏さんの名前がわあつと出て来るのです。その仏さん以外に、まだ助かるのと言つて、そうそう助かるよと。阿弥陀さんを称えなさいと言つて、ここに來ると今度ははつきり十方十仏でなくて阿弥陀の名前になつて來ているのです。

分かりますね。「阿弥陀等の諸仏、また恭敬礼拝し、その名号を称すべし」。このように龍樹も十方十仏から弥陀になつて來ているのです。

そして、その次に行きますよ。「いま當につぶさに無量壽仏を説くべし。世自在王仏乃至その余の仏まします、この諸仏世尊、現在十方の清浄世界に、みな名を稱し阿弥陀仏の本願を憶念することかくのごとし」。実は、十方諸仏は、たくさん仏さんたちは、実は阿弥陀の本願を思いながら居る仏さんたちなのですよ。阿弥陀仏こそが「根源仏」なのです。こゝにこゝに阿弥陀の仏に極まつていきます。そして、「もし人、我を念し名を稱して自ずから歸すれば、すなわち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得、このゆゑに常に憶念すべし」と。偈をもつて稱讚せん」と。

こゝ言つて、阿弥陀一仏に極まつていつて、最後に阿弥陀の歌で終わつていきますよ。こんなふうには『十住毘婆沙論』はたくさん仏さんから始まるんですけども、ずつと読むと阿弥陀のみ名ですよと、こゝに分かる。阿弥陀のみ名で、最後には、今度は龍樹自身が、私は阿弥陀に歸依してこゝにこゝに歌を歌うんですよと、こゝに、阿弥陀に歸依した龍樹の歌で最後は結ばれていくわけですよ。そうすると誰が読んでも、これは阿弥陀のみ名を稱えて、信心によつて空の覺りを得ているのだと、こゝに龍樹が説いてるじゃないかと。こゝを読めばすぐ分かるでしょうと、こゝにこゝに引文になつていて、こゝにこゝに引文になります。分かりますか、言っていること。若干名「うん」と言つて下さつたので(笑)、積み残しであろうと読めば読むほど親鸞聖人が実に巧みに『十住毘婆沙論』の龍樹の言葉の大切なところだけを実に巧みに引用して、今私が説明した通りになつていくわけですよ。

そうすると龍樹も、実は空の覺りを悟つたと言つて、あれは自力で修行で覺つたのではなくて信心によつて南無阿弥陀仏と阿弥陀如来に歸依して、そして浄土に生まれたのだと、親鸞聖人もそのように見ておられる。ということが分かります。せつかくですから、この阿弥陀の歌を皆さ

んと一緒に読んでみましよう。

「無量光明慧、身は真金の山ののごとし。我いま身口意をして、合掌し稽首し礼したてまつる。」

はい、ここまで分かりますね。阿弥陀如来は無量の智慧の光によって、身は、お体は金の山のようなお姿をしておられる。龍樹：私は、こういう意味ですよ、私は今、身口意をして合掌し阿弥陀如来に五体投地して稽首して礼拝しているのです。龍樹がこう言っているわけです。ですから「これは智慧の光の阿弥陀に遇った。ここから始まる。皆さん分かりますね。」

お釈迦様に遇った阿難は、今日の世尊は智慧の光に輝いていますと言つて叫ぶでしょう。光明無量が先ですね。光明無量と言つるのは前にも申しましたように、人間が逆立ちしても分からないことを仏様に見抜かれていた、だから仏様の言葉が光という意味を持って、私たちのところに届くのだと、その時には、私たちの方は何にも真実なものではなかった。今まで自我を中心にして、偉そうに生きてきたけれども、自我を中心にして生きてきたということは妄想だから、その罰として苦しみを受けてきた。今はつきりと妄想が破られて、仏様の世界に目を開いた。それは仏様の教えに由る。その教えが智慧の光という意味を持つのだ。そこから龍樹も始まっているわけです。

だから龍樹も阿難と同じように無量光明慧、身は真金の山ののごとし、私、龍樹は身口意をして、五体を投地して合掌し稽首する。稽首すると言つのは分かりますね。インドの最も丁寧なお辞儀の仕方、足に頭を付けることです。稽首すると言つのはね。時々インドに行くときやつています。空港なんかで、家長とか年寄りを尊重するのです。だから若いひげ生えた立派な青年と奥さんが稽首礼拝して、そしてじいちゃんんの足に頭を付けて礼拝している姿が時々見受けられます。「ああ。あれが恭敬礼拝というのやな」と見ているのですが、そういうことです。だから身口意というのは、身と口と心、全部ということは五体挙げて阿弥陀の足

に稽首するんだというところから始まる。なぜかと言うと、それは阿弥陀の説法が、今、光として届いたからだ。こういう意味ですね。

そして、「人よこの仏の、無量功徳を念ずれば、即の時に必定に入る。このゆえに我常に念したてまつる。」

その光によって、分別が破られて、無量力、無量寿の世界に今帰依したのだと。それによって必定の菩薩、もう二度と退転しない仏の道に立つことができた。このゆえにわれは常に念したてまつる。これが引用されています。これは分かりますね、「帰命無量寿如来、南無不可思議光」、その通りです。最初に龍樹は南無不可思議光、私は南無不可思議光に遇ったのだと。だから私は帰命無量寿如来、無量寿に帰依して、そしてこの世を超えるものになった。だから必定の菩薩・覺りを悟った菩薩と同じ位になったのだ。ここに帰命無量寿如来、南無不可思議光というふうに龍樹も歌を歌っているわけです。

そしてその次に、「もし人、仏に作らんと願して、心に阿弥陀を念したてまつれば、時に応じてために身を現したまわん。このゆえに我、かの仏の本願力を帰命す。十方のもろもろの菩薩も、来りて供養し法を聴く。このゆえに我稽首したてまつると。」

今、帰命無量寿如来、南無不可思議光と言いましたね。ところがその阿弥陀仏は、実は本願力なのだ。ということがここで歌われるわけです。「我、かの仏の本願力を帰命す」。ですから、この本願力に帰依した人たちは、みんな仏になり菩薩になる人たちだからね、本願力が「十方のもろもろの菩薩も、来りて供養し法を聴く」というように、本願力によって十方の仏達も仏になつていると。だから私も阿弥陀の本願力に帰命するのだと、今稽首するのだと、いうふうに阿弥陀如来の帰命無量寿如来、南無不可思議光と言ったあとに、阿弥陀如来は本願力なのだ。いうふうに龍樹が歌っている。すごいことじゃないですか。よく分かるでしょう。

そしてその次、「もし人善根を種えて、疑えばすなわち垂開けず。信心

清浄なる者は、華開けてすなわち仏を見たてまつる。十方現在の仏、種種の因縁をもつて、かの仏の功德を嘆じたまう。我いま帰命し礼したてまつると。」

「こは、今日私が最初に申し上げていたように、もし人が「善根を植えて」とあるでしょう。これは仏教に帰命無量寿如来、南無不可思議光と、仏教に帰依した人でも、自分の善根を植えて、仏智疑惑をすれば花が開けないと。これは二十願の機です。龍樹はすでに二十願の機までちゃんと歌っているというわけです。人は善根、良かれと思つて、自分を立てようとするために、自分を仏にしようとするような根性が抜けない。それは「仏智疑惑」と言つものだと。その仏智疑惑は絶対に花が開けない。「信心清浄なる者は」、また「清浄が出て来るね。浄土からいただいた信心ならば、阿弥陀の覚りの花が開いて、阿弥陀仏に遇う事が出来ますよ。「十方現在の仏、種種の因縁をもつて、かの仏の功德を嘆じたまう」。世界中の仏が本願に目覚めて、そして様々な因縁で、分かりますね。富める者は富める因縁、無い者は無い因縁、健康な者は健康の因縁、病氣なつた者は、病氣になつたことを因縁として、阿弥陀仏の功德を誉めておられる。それは阿弥陀仏は本願だから、どんな人も仏にするから、だから阿弥陀こそは諸仏の「根源仏」である。こう歌っているわけです。」

次に行きますよ。「かの八道の船に乗して、よく難度海を度す」。これは親鸞聖人が『教行信証』の「総序」で使うでしょう。「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船」、あれです。あのもとになつた歌ですね。「八正道の船に乗じて」、こういう意味ですけども、「八正道」というのは、菩薩道で言えば八正道なのですが、これは「本願の船」。八正道がもし私たちに実現するとすれば、本願に帰する以外にないから、自分で八正道に立ちましよう言うのが菩薩道なんだけども、龍樹はこれは「本願に帰して八正道に立つたのだ」と言っているのです。だから本願に立たなければ、私たちに八正道なんてありません。

だから親鸞は「こを読み替えて、「弘誓の船に乗る」というふうに、本

願に読み替えたのです。龍樹もそのつもりで、「かの八道の船に乗じて」、阿弥陀如来の本願力によつて、私は八正道と言う仏道の船に立つことが出来ました。それこそ渡り難いこの世を渡す船であります。「よく難度海を度す。自ら度しまた彼を度せん」。自分が救われると同時に一切の人を救う、それが本願力の船である。「我自在人を礼したてまつる」。自在人というのは阿弥陀のことですよ。私は阿弥陀を帰依します。つまり阿弥陀のことを異訳の經典があるでしょう。『平等覚経』とか『大阿弥陀経』とか、その中に「自在人」と出て来たり、それから「清浄人」。167ページの2行目に「清浄人」というのがあつたね。これも阿弥陀のことです。異訳の經典にそう出て来ます。

ですから龍樹は「自から度しまた彼を度せん」。私も救われると同時に一切の人が本願によつて救われるのである。だから私は阿弥陀仏を礼拝するのです。根源仏の阿弥陀仏を礼拝するのです。「諸仏無量劫に、その功德を讃揚せん」、なお尽くすことあたわじ。諸仏。諸仏の生まれてきた歴史、無量の長い間の諸仏たちはたらきを誉めようと思つと、それはとても言葉では誉められないと。だから、諸仏を念じるといふよりも、根源仏である清浄人。阿弥陀仏です。阿弥陀仏に帰命するのだと。それでいいのだと。阿弥陀仏に帰命すれば、諸仏がみんな守ってくれると。言うのがあつたでしょう。阿弥陀仏が根源仏だから、阿弥陀仏に帰命すれば本願によつて生まれてきている諸仏たちなのだから、その諸仏がみんな守ってくれる。それを龍樹はこういう言葉で言っているわけです。

「諸仏無量劫に、その功德を讃揚せん」、なお尽くすことあたわじ。清浄人を帰命したまつる。」

阿弥陀仏が根源仏だから、だから私は本願を説いた阿弥陀に帰命するのだと。「我いままたかくのごとし。無量の徳を称讃す」。私は、今、阿弥陀仏の無量の徳を誉めたたえるのです。「この福の因縁をもつて、願わくは仏、常に我を念じたまえ」と。これで終わつていくわけです。自分は世親の『願生偈』のように、阿弥陀仏に帰命するという歌を歌つた。その因縁



によつて、私を助けてくださいと、本願によつて救ってくださいと言つて龍樹が頭を下げて終わつていくところです。

いい歌でしょう、「弥陀章」の偈頌。これだけでも立派でしょう。これは龍樹が私は帰命します。私は稽首しますとずっと歌つていようでしょう。分かりますね。世親の「願生偈」で言うと、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」に相当するのです。分かりますね。「帰敬偈」に相当する。だから次に『浄土論』に曰く、我依修多羅 真実功德相から『浄土論』が引用されるわけです。なぜこんな引用をするのか、私はもう長い間、何十年も解けませんでしたが、なぜ「願生偈」が「我依修多羅」からはじまるのか、訳が分からない。ところがこれ続けて読むと、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」は龍樹が言つている。だから龍樹と世親を一人として見ている。親鸞は、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来を龍樹が言つている。それを「我依修多羅 真実功德相」と世親が言つている。龍樹と世親と、別々の人なんだけれども、一人として見ている。分かりますね、そう言う引用の仕方になつたよ、この引用の仕方を見れば、どう考えてもそうなつていよう。そうすると龍樹と世親は別のんじゃない、一人なんだというふうに読んでいます。そして一人なんだと読んで決めたのは『論註』なんです、というふうには、後で『論註』のところで証明していきます。だから龍樹・天親を『大経』の論師(ろんし)であつて、それは信心によつて空の覺りを得た菩薩なのだと思つたのは曇鸞なのです。曇鸞の『論註』なのです。曇鸞の『論註』から見れば、ここは、実は龍樹・天親は一人なのですよと言つて、一人として引用している。こういうところに親鸞聖人の、まあ何と言ふかなあ、すばらしい学者としての見識があるわけよ。

こういう引用の仕方、「私が言いたいことを分かつてくれるかなあ」という。僕は分かつたんです(笑)。いやいや、ほんとほんと、何十年も苦勞した。なんで『論註』がずっと後引用されるんだけど、なんで世親の「我依修多羅 真実功德相」、これだけしか引用してないの？、なんでなんや

ろう、なんでなんやろうと、ずうっと悩んで、夜飛び起きて、「そうだ！」と思つて読むと、前から読むと、ちゃんと「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国 我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相応」と続いているでしょう。「そうだ！」と思つてどれだけうれしかったか、と親鸞聖人はおっしゃつていふのだと思ひますよ。

こういうところに親鸞聖人の凡夫として、自分の言いたいことを言わないで、引文だけでね、こう見れるでしよう。一人として見て下さつたのは実は曇鸞なのですよ。曇鸞のところの『論註』にいくと、「二道釈」から始まつて、そして「世尊我一心 帰命尽十方」からはじまつて、「願生安樂国 我依修多羅」と全部出て来るわけですよ。「二道釈なんてどこにあるか」と、さつき龍樹の「易行品」のところにあつたでしよう、「二道釈」があれを受けて曇鸞が言つてるんだから、「二道釈はね。だから曇鸞の『論註』は、あの龍樹の二道釈を受けているんですよ。」

そして龍樹の、「この「弥陀章」の偈が「世尊我一心」にあたるのですよ」と。だから『論註』は「世尊我一心」からはじまる。註釈が。そして、「我依修多羅」も出て来る。というふうには、全部前の方を龍樹と天親を一人の人として見て、曇鸞が『論註』で引用しているということになります。そうすると親鸞聖人は偉いよ、やつぱり。泥棒をしない。龍樹と天親を『大経』の論師と見破つたのは曇鸞です。曇鸞の『論註』にちゃんとそう書いてあるでしよう。だから私は何も言うことはありません。曇鸞大師の『論註』の言う通りです。と言つて曇鸞大師が龍樹と天親を最初の『大経』の祖師だと決めたのだと。そして二人の祖師は実は一人なのだ。それは阿弥陀に帰命したということから見ればね、どちらも阿弥陀に帰命した人なのだから、一人なのですよ。そんなふうには曇鸞大師が教えてくださつていふでしようというのが、この引文の仕方からよく分かります。

まあそんなふうになつていふと言つてぐらゐを分かつていただく有り難いかな。小さいことを言ひ出すと切りがないのですが、なぜか81歳ま

で(あと10年!)終われと(笑)言うわけですから、まあ簡単にすつと龍樹のところをよう来しました。ここは真剣に読むと何が何やら分からないところです。けど、私が今日説明した通りになつてますから、聖典を何度も読んでみていただきたいと思います。一応それでは今日はここまでにしましょう。ありがとうございます。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

## 質疑応答

質問者1: すみません、先生、今日はどうもありがとうございます。先ほどの龍樹菩薩と天親菩薩を一人として見るということなのですが、このような見方を親鸞聖人がされてきたから、法然上人の信と親鸞聖人の信は同じであるというような発言と言うか、そのような解釈という言い方もおかしいのですが、受け取りというのがあったのかなというふうにならぬかと思つたのですが、そういう解釈でよろしいでしょうか。

先生: うん、そういうふうと言うと七祖全部一人なのよね。ところが龍樹と天親をあえて一人と言うのは、これは大乘仏教をまともに勉強している人だったら誰でも分かる。大乘の仏教の流れは二つある。

龍樹を祖師とする「空観」の流れと、それから世親を祖とする「唯識」の流れと二つあつて、これは大乘仏教の二つの潮流、流れとして、大きな流れだから、これを一つというわけには絶対にかないということが基本的にあるわけです。ところが、それを一つだと曇鸞が言った。しかも曇鸞が言った時には、今言った「本願の信心」というところで一人なのだといふのが曇鸞なのです。そんなふうに関鸞の信心と法然の信心が一つだと言うのなら、そういう意味から言えば七祖の人はみんな一つになつて

いる。

そうではなくて、今言った大乘仏教の大きな伝統の中で、どうしても一つだと言えないものを一つとして見たのが曇鸞なのだ。それが言いたがために、ここは龍樹と天親が一つだと、一人だというふうに言っているのだと思います。それは『教行信証』は単なる個人の書物ではなくて、大乘仏教を勉強している人たちに対して書いた書物だから、その人たちに納得させるために、どうしてもこう言うふうにならなければならなかった。理由はそっちの方にあると思います。

質問者1: ありがとうございます。

先生: 分かりますね、空の覚りの流れと、大乘仏教には唯識の流れと二つあるわけです。まず最初は空の覚りですけどね、この空の覚りは、「八不中道」(はつぶちゆうどう)と言って「空って何ですか?」と聞くと、「いや、その何ですか?」と聞いているあなたの分別が違うのだ」と跳ね飛ばされる。「それなら空ってからっぽなのですか」と言うと、「いや、その空っぽと考えているあなたの考えが違うのだ」と、また跳ね飛ばされる。そんなふうに関の覚りというのは掴みどころがなくて、誰が言っても分別だと言つて跳ね飛ばされるから、それなら何か分かんやないかということが起こつてきたわけです。大乘仏教でね、それなら何か分かんやないかということはどうなるのかと言うと、世親が「それじゃあ分かつた」と。跳ね飛ばされる人間の方の、分別だと言っている人間の方の意識を分析していきましようというのが「唯識」の学問です。簡単に言えば、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を統率しているのに「末那識(まなしき)」という自我がある。そして末那識という自我を中心にして六根がありますね。見るとか聞くとか匂うとか、感覚と意識がありますね。それを全部統率しているのが末那識である。

ところが夜寝て、次の日起きるとまた元の自分になつている。自我だけ



先生・ああ、それはね、お釈迦様に聞かないと分かりません(笑)。なん  
でかというとう東方から始まっているからね。東西南北とはじまっているお  
釈迦様の説法だから、それはなぜ東からなの、西方浄土が一番中心なの  
だから、西から説いたらいいじゃないのと言っつのは、これは僕らの分別だ  
けど、お釈迦様が東から説いて、そして東西南北、四維、上下、というふ  
うに歌を説いて下さった。だからあれを「東方偈」と、お釈迦様の説法に  
したがってそう言っつているので、その理由は私は分かりません(笑)。なぜ  
東なんだと言われても。

田畑先生・はい、ありがとうございます。

住職・すみません、それで、東方ということ、「東方偈」を「往觀偈」(お  
うごんげ)と言っつますね。結局、東方の諸仏国、今日の「十方十仏章」で関  
連するのですが、結局、東西南北、四維、上下、諸仏もまたしかなり、つ  
まり世界中の菩薩衆が根源仏である阿弥陀・無量覺を、往き觀たてまつ  
ると出てきますから、「往觀偈」と言っつのが内容そのものの偈の言葉だと  
思っつますが、ただその、「東方偈」と言っつ、ことさらなんか「東方」と言っつ  
が、「東方諸仏国」からはじまるから「東方偈」と言っつのか、それとも「東  
方」と言っつことに別の深い意味があるのかということ、話題を出しまし  
た。

先生・ご住職がおつしやる通りで、あれは「おうかんげ」つて言っつますね。  
「おうごんげ」と読っつむんですけど、往く、往生の「往」、そして浄土に往っつ  
阿弥陀仏を見る、「觀」、「往觀」、「往觀偈」。「往っつて觀る」。それがご住職  
がおつしやっつているように浄土に往っつて觀るんだから、それはちゃんとう「往  
觀偈」と言っつことが正しいんだと。ただまあ「東方」からはじまるから、だ  
から「東方偈」、「東方偈」と言っつならわされて言っつすけれども、深い意味

はないと思っつます。東方からはじまっつて、東方の菩薩たちから往きますの  
でね、深い意味はないと思っつます。けども「東方偈」と呼びならわされて  
言っつすけど、そこに何か意味があるかと言っつたら、私もよく分かりませ  
ん。

住職・東、南、西、北、(トナンシヤー・ペイ)の、あの順番やなど。ありが  
たうござ言っつました。

先生・そうですね。麻雀もそうだから、そんなことはない(笑)。  
そんな馬鹿なことはありません。

質問者2・また先生から怒られそうなのですが、先生のお話で、私がず  
つと思っつていた、どうして空の覺りを唱えた龍樹を親鸞聖人が七祖の最  
初に挙げたのかというの、私が仏法が少し分かつて来てからのずつと疑  
問でした。今日の先生の龍樹のところの説明で、あまりにもよくできて、  
よく分かった氣がするんですけど、読み替えがあるというふうにおつし  
やっつたのですが、親鸞聖人が自分の領解を分かりやすくするために読み  
替えてるということなんでしょうけど、先生この、最後の偈ですよね。「弥  
陀章」の偈で、5行目に「心に阿弥陀を念じてたてまつれば」とありますけ  
ど、この阿弥陀と言っつのは、読み替えずにもともと龍樹がこう言っつふう  
に歌っつていたのでしょうか。

先生・歌っつてます。これは龍樹の言葉です。歌の中にちゃんとあります。  
直っつて言っつません。

質問者2・この歌自体はほとんど読み替えというのはないのですか。

先生・ここに出っつている文章は読み替えは一切ありません。ただ、間を抜い  
て言っつます。間を抜いて必要なところだけを引っつ付けてる。だからこんなふ

うになっているわけですね。けどもともとの、帰って『真宗聖教全書一巻』を見てもらん、もつと長いんだ。だから途中ずつと抜いて、大事なところだけを引つ付けて、真宗を表すところだけを、この一つの歌にしているけれども、言葉は一切ここは替えていません。

質問者2：はあ、長い間の疑問がもう相当解消されました。ありがとうございます。

先生：龍樹はすばらしいでしょう。そしてこういうふうな歌にして、「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」と龍樹も言ったんですよというふうになつてくるでしょう。そこが大事なね。親鸞聖人はそういうふうな、ここは引用してるわけです。しかし、くどいようですが、この言葉は一切替えていませんので、歌の言葉は。

質問者2：先生もう一つ、さっきの何か釈然としないのですけど、「東方偈」ってご住職から昨日訊かれてですね、本当は「往觀偈」と言ったら意味が分かるけど、「東方偈」というのは、私の理解は、東のいつぱいの諸仏がインドは西方ですから、西の阿弥陀さんのところにみんな行つて聞いたんですよ、私は合っているかどうか分かりませんが、私はそういうふうな「東方偈」という言葉を自分勝手に理解してるんですけど答えたんですけど、全くはずれて言われそうなんです(笑)、そんな意味はないんですよか。

先生：だから、これは、例えば、『大経』の上巻の歌は「三誓偈」という場合と四十八願を説いた後に重ねて歌うから「重誓偈」というふうな言う場合とね、意味を取つて言えば、まあ「重誓偈」なのかな。けど普通「三誓偈」と言ったりするでしょう。それと同じように、これ仏教の多分勉強していく流れの中で、この歌をどう読むかということ、あつたのだと思

ます、最初はね。だからこれは東方の人達が行くんだから「東方偈」がいいんだというふうな読んだ人達もおれば、いやいや「往觀偈」と言った方が意味が通じるよと言った人達もいて、そういうくらの意味に考えた方がいいと思います。後の人達の言い方ですから、経典にこう言いますと出て来ませんから、あとの人達の言い方です。だからそれくらいだと思つてく

質問者3：先生すみません、レベルの低い質問で申し訳ないですが、まあ仏法を全く勉強しなくて、真宗の檀家の家に生まれて、おじいちゃんおばあちゃんと仏壇の前で南無阿弥陀仏と称える習慣になつて、朝仏壇の前で南無阿弥陀仏とずっと続けている方と、長い間仏法を学んできた人の南無阿弥陀仏というものの「利益」というものは同じなんでしょうか。違うのでしょうか、そのへんがちよつと。

先生：あの、必ず仏様になると言うのが阿弥陀の利益ですから、それは別に深くても浅くても、理由が分からなくても、「念仏称えなさい」と。一緒です。

田畑先生：丁度4時半になりましたので、今回の会はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございます。最後に「恩徳讃」をよろしく願います。(「恩徳讃」、終了)

【テープ起し】安達 洋太郎さん

【添削】田畑正久先生、住職